

子どもたちに「確かな学力」を身に付ける授業

岩手県教育委員会では、子どもたちの学力向上に向けた取組として、これまでの「確かな学び」「豊かな学び」を一體的に捉え、『確かな学力育成プロジェクト』と位置付け直し、全県での取組や学校の組織的な対応の強化をより一層推進することとしました。

各学校では現在、「実践→検証」を積み重ねていることと思います。「目指す子ども像」「3つの資質・能力（知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度）を育成する授業展開」等、校内で共通理解を深め、全教職員が一丸となった取組の充実をお願いいたします。

4月30日実施予定の「管内研究主任研修会」中止に伴い、当日の講義資料を各学校に配布しました。校内研修等での活用をお願いいたします。また、別紙の「授業づくりのポイント」「指導案の作成例（岩手県総合教育センター作成）」についても併せて活用いただければ幸いです。

『授業改善に関する課題』《「令和2年度学校教育指導指針（岩手県教育委員会）」（P11-12）より》

「いわての授業づくり3つの視点」の取組から見えた課題	R1 県学調学校質問紙 積極肯定の割合が低い項目
<p>① 3つの視点それぞれの意味・意義が共有されず、形骸化している。</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもにとって必要感のある課題となっているか 双方向によるペアやグループの学び合いになっているか 振り返りの時間確保及び記述内容の吟味がなされているか <p>② 指導者による必要以上の見通しにより、子どもの主体性喪失のおそれがある。</p>	<p>③ 調べたことや考えたことを分かりやすく文章に書く指導</p> <p>④ 児童生徒が学習の成果・課題を実感できる振り返り</p> <p>⑤ つまずきに対応した授業改善</p>

課題解決のポイント

課題②の改善に向けて【子どもの主体性を育むための見通し】

解決の方向性を与えすぎていませんか？

→

△新たな学びが生まれにくくなり、学習意欲が減退してしまう。

△授業前半で課題を解決してしまい、時間を持て余してしまう。

→

必要最低限の見通し

→

昨日やったあれを使えばできそうなんですけど…

前とは～が違うから、そこに目を向ければ…

→

「どうしてだろう？」や「ってみたい！」という思いを抱くような見通しを！

課題④の改善に向けて【自己の変容を実感できる“学習の過程・成果”の振り返り】

なんとな振り返りませんか？

→

★学びの成果・課題を感じた振り返りになるように、評価問題等を『**その時間の学びを生かして考える問題**』にします。終末につまずくことで「今日はできなかった」という思いだけが残らないように、「分かった」「できた」を実感させる授業展開が大切です。

★学んだことを、子どもたちが振り返りの場で具体的に表現することで、この日の学びを再整理することができます。そのために『**学びの成果が分かる板書**』『**具体内容を表現させる発問**』が大切です。

T1: OOさんの説明の“**どういうところ**”が分かりやすかったですか？

T2: 前のやり方って“**どういうやり方**”ですか？

T3: できるようになったのは“**どんな考え方**”を学んだからですか？

今日は少し難しかったけど、最後は分かったので良かったです。

始めはよく分からなかったけど、OOさんの説明を聞いて分かりました。

前にやったやり方を使えばできることが分かりました。次も使ってみたいです。

改めて確認 “授業づくりのポイント”



- 1 学年や領域の目標及び指導内容を『学習指導要領』で確かめましょう。
(「知識及び技能」「思考力, 判断力, 表現力等」「学びに向かう力, 人間性等」)
- 2 目の前の子どもの実態をふまえた単元のゴール(目指す子ども像)を明確にした「単元の指導計画」を立て、見通しをもって授業を組み立てましょう。
- 3 学校教育指導指針に示された「いわての授業づくり3つの視点(P15)」及び、「各教科等の指導の要点(P28-36)」をもとにした授業展開に努めましょう。
- 4 子どもの達成状況を客観的に見て、十分達成されていない場合は、指導(授業展開)のどこに原因があるかを探り、次時に生かしましょう。

『いわての授業づくり3つの視点』
をもとにした授業展開

見通し

- T: どんな結果になるだろう? (予想)
 T: どうやったら分かるかな? どんな準備が必要かな? (方法)
 T: なぜそうなる (ならない) のかな? (理由)
 T: なぜ前回とは違うのかな? なぜ〇〇ではだめなのかな? (比較)
 T: どんな考え方が使えそう? (既習想起)

★一部の子どもへの反応だけで進めない。全員が解決の方向性を思考する時間を設け、一人ひとりの見方・考え方が働くようにする。

課題解決

★子どもが各教科等における「見方・考え方」を働かせながら、主体的に課題解決に取り組める学習活動を充実させる。

- ・分からないところを自分で調べたり友だちや先生に聞いたりする。
- ・よりよい考えに修正し、理由や根拠を明確にしていく。

★目的に応じた効果的な学習形態(ペア、グループ等)を適宜設ける。

- ・子どもに、“活動の目的”を明確に伝える。
(何のために話し合うのか、何を話し合うのか、何を見いだすのか)

振り返り

★課題解決の『過程』『成果』を自分の言葉で表現させる。

- ・どのような考えが解決につながったのか。
- ・何ができるようになったのか。
- ・他の場面で活かすことはできないか。
- ・つまづきの原因は何か。解決できた根拠は何か。

学んだことや自己の変容(粘り強さや解決までの調整力も含む)を子ども自身が実感できる振り返りに!

—指導案の作成例—

★令和2年3月に国立教育政策研究所から示された「学習指導要領」及び『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』を参考にした指導案の形式例

(岩手県立総合教育センター URL http://www1.iwate-ed.jp/db/db2/sid_data/shidouan-youshik_center2020i.pdf)

第〇学年〇〇科学習指導案

日 時：令和2年〇月〇日 〇時〇分
対象学級：〇〇市立〇〇〇学校 〇年〇組
指導者：〇 〇 〇 〇

A-1
ア 教科によっては「題材名」などとなる。
イ 単元名の付け方は各教科の特性による。
ウ 「学習評価に関する参考資料」の事例等を参考にする。
エ 「教材名」は特に必要な場合を示す。

1 単元名 田沢湖のクニマス問題を考えよう～自分の解釈を説明する～
教材名 「幻の魚は生きていた」(光村図書 国語1)

B-1
ア 「内容のまとめ」とは、学習指導要領「2 内容」の項目等をそのまとめごとに細分化したり整理したりしたもの。
イ 「2 内容」の記載はそのまます学習指導の目標となる。

2 内容のまとめ
第1学年
(知識及び技能) ②情報の扱い方、
(思考力、判断力、表現力等) 「C 読
解」
第2学年 「C 関数」(1) 「一次関数」
理科 第3学年 「第2分野」(6) 「地球と宇宙」
社会 「公民的関与」
C 私たちと政治 (2) 民主主義
技術 「技術分野」 「A 材料と加工」
(1) 生活や社会
音楽 「第1学年」 「A 表現」(1) 職業

B-2
「3 単元の目標」には3つの資質・能力を記載します。

C-1
まず、単元において身に付けさせたい資質・能力を明確化する。

3 単元の目標
(1) 原因と結果の関係について理解することができる。 [知識及び技能] ②ア
(2) 「読むこと」において目的に応じて必要な情報に着目して要約し、内容を解釈することができる。 [思考力、判断力、表現力等] ①イウ
(3) 言葉が持つ価値に気づくとともに、進んで読書をし、我が国の言語文化を大切にすると、思いや考えを伝え合おうとする。 [学びに向かう力、人間性等]

C-2
ア 「学習評価に関する参考資料」を基に記載。(語尾や書きぶりをしっかり参照！)
イ 資質・能力との関連を明記する。(明記の仕方は教科によって異なっても構わない)
ウ 特に必要な場合(国語は必ず)は指導事項との関連も示す。([知識及び技能] ②ア)
エ 国語は「()」(丸印カッコ：内容として示されているもの) 「」(角括弧カッコ：内容には示されていないもの)を例のように使い分けることとする。
オ 順番は、上から「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」とする。
カ (1) (2) (3) と表記する(3つ以上の場合は(4) (5) と続ける)。
キ 上記以外のは教科の特性によって判断する。
ク 音楽や美術の(共通事項)の扱い等

4 単元について
(1) 児童(生徒)について
ア これまで～という学習を行っている。
イ 前単元において～という学習経験がある。
ウ ～ということが身に付いてきている。
(2) 教材について
ア 本教材は～という特徴がある(～に位置付けている)。
イ 本教材は～に適している(ふさわしいと考える)。
ウ 補助教材として～を使用する。
(3) 指導について
ア 本単元における言語活動(課題を追究したり解決したりする活動、数学的活動など教科の特性による活動)の特徴等(国語では「(3)本単元における言語活動について」として項を起してもよい)、単元の大まかな流れ等
イ 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた工夫点等
ウ 研究の手立てとの関わり(「(4) 研究との関わり」として項を起してもよい)

D-1
ア 既習事項の習得状況を簡易書きで端的に示す。
イ 2～3点程度とする。
ウ 不十分さについては記述しない。

D-2
ア 教材の系統性・特徴・価値を簡易書きで端的に示す。
イ 2～3点程度とする。

5 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
① 田沢湖におけるクニマスの絶滅の原因と結果を捉え、ともに、結果は次の原因となるという原因と結果との関係について理解している。 [知識及び技能] ②ア	① 「読むこと」において教材文の二つの問いとその答え、一般化された筆者の意見に着目して田沢湖のクニマス問題を要約し、田沢湖のクニマス問題はどうなるのかについて筆者の提案の具体的な内容について理解している。 [思考力、判断力、表現力等] ①イウ	① 各時間の振り返りを生かして学習を進め、単元の課題に粘り強く取り組み、「田沢湖のクニマス問題」は、どうなるのか問題解決と言えぬのかについて筆者の提案に対する自分の考えをもととしている。

E-1
ア 「学習評価に関する参考資料」を基に記載。(語尾や書きぶりをしっかり参照！)
イ 必要に応じて指導事項との関連を明記する(国語は必ず)。(②ア)
ウ 表で示すこととし、順番は、左から 知識・技能 思考・判断・表現 主体的に学習に取り組む態度 とする。また、観点ごとに①②と番号をふる。
エ 「知識・技能」の評価規準を「知識」と「技能」に分けて設定する教科(外・音・英・美)の場合は、「知①」「技①」のように表記する。
オ 目標を細分化して評価規準を作成することもあることから、目標の個数と評価規準の個数が一致するとは限らない。

6 指導と評価の計画(6時間) 4列版(「段階」がないもの)の例 ①

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法
1	○タイトルから誘導疑問(「幻の魚とは?」「どこで生きていたの?」など)をもちやり、内容の大体をつかむ。 ○田沢湖のクニマス問題は、どうなることが問題解決と言えぬのかを考えていくという単元の見通しをもつ。	・教材への興味や疑問が深まるようニュース映像のPPを準備する。 ・抽象度が高い最後の文を取り上げ、どういう意味かを問いかけること課題化につなげる。	
2	○序論、本論1、本論2、結論という部分に分節する。 ○田沢湖のクニマス問題のあらましを、短くまとめる。	・二つの大きな問いの存在に着目するなどして、基本構成を捉えられるようにする。 ・二つの問いの答え、一般化された筆者の意見は構成要素とするように助言する。	【思・判・表①】 【学習シート】 二つの問いとその答え、一般化された筆者の意見に着目して田沢湖のクニマス問題を要約している。

F-1
ア 「学習活動」の主語は「児童(生徒)」になる。
イ 可能な限り具体的に示す。
ウ 語尾は「する。」

F-2
ア 「指導上の留意点」の主語は「教師」になる。
イ 生徒の学習活動を充実させるために教師が何をすべきかを具体的に示す。
ウ 語尾は「する。」
※「させる。」は使用しない。

6 指導と評価の計画(6時間) 5列版(「段階」があるもの)の例

時	段階	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法
1	課題把握	なぜ、私たちは必ずしも協働することができないのか。 よりよい公共的な空間を実現するための条件とは何か。	ア 特に必要がある場合は「段階」等の欄を設け、学習過程等(課題把握・内容と構造の把握等)を示しても構わない。 イ 教科や研究によっては単元時間等の学習課題や単元全体の課題等を示す場合もある。	

F-3
ア 特に必要がある場合は「段階」等の欄を設け、学習過程等(課題把握・内容と構造の把握等)を示しても構わない。
イ 教科や研究によっては単元時間等の学習課題や単元全体の課題等を示す場合もある。

「6 指導と評価の計画」は、まとめごとの評価も適宜設定することが大きな特徴です。(7以降は上記 URL 参照)



時間	ねらい・学習活動	評価規準(評価方法)		
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1	余りがある場合でも除法を用いてよいことや、答えの見つけ方を具体物や図などを用いて考える。		・思①(行動観察、ノート分析)	・態①(行動観察、ノート分析)
2	余りがある場合の除法の式の表し方や、余りなど用語の意味を知る。余りと除数の関係を理解する。余りと除数の関係を調べる。	・知①(ノート分析) ・知③(ノート分析)		
3	余りがある場合の除法の式の表し方や、余りなど用語の意味を知る。余りと除数の関係を理解する。余りと除数の関係を調べる。	・知①(ノート分析) ・知③(ノート分析)		
4	等分除の場面についても余りがある場合の除法が適用できるかを考える。等分除の場面でも、答えの見つけ方を考える。		○思①(行動観察、ノート分析)	
5	余りがある場合の除法計算について、答えの確かめ方を知る。	・知②(ノート分析)		
6	日常生活の場面に当てはめるときに、商と余りをどのように解釈すればよいかを考える。商に1を加える場合や加えない場合について、それぞれ考える。		・思②(行動観察、ノート分析)	○態①(ノート分析)
7	学習内容の定着を確認し、理解を確実にする。(章末問題)	・知①②③(ノート分析)		
8	学習内容の定着を確認する。(評価テスト)	○知①②③(ペーパーテスト)	○思②(ペーパーテスト)	
9	学習内容を適用して除法の問題を考えたし、解決し合ったりする。			○態②(ノート分析)

まとめごとの評価規準例(小学校算数)

『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』より

(文部科学省 国立教育政策研究所)